

題材【CASE 2…音楽室の怪談】

その学校の音楽室には、恐ろしい噂があった。誰もいないはずの真夜中に、ピアノを弾く音と、大勢の笑い声が聞こえるというのだ。

「なんでも、ピアノリストを目指していた女子が事故で亡くなって、その霊が弾いてるって噂だぜ」生徒の1人が友人に言った。

「それ、俺も聞いたことある。

でも、怖いのは、それだけじゃないらしいぜ。

最初は、静かに弾いているのに、

だんだんと鍵盤を叩くような、

鬼気迫る演奏になるらしんだよ」

「よっぽど強い恨みか想いを抱いてたのかな」

不気味な笑い声と鬼気迫る演奏を想像し、

話をしてきた生徒たちは、小さく震えた。

【応募作品】

あの日の真夜中――。

噂の音楽室では、ピアノが鳴らされ、笑い声が響き始めた。

「ええい、またか！」

警備員は、すぐさま懐中電灯をつかんで駆け出した。

だが、その顔に恐れる様子はない。

「ほら出てけ、シツシツ！」

警備員が追い払ったのは、幽霊ではなく野良猫の群れ。

猫たちがピアノに駆け上がって走り回ると、「鬼気迫る演奏」が始まるのだ。

彼らの甲高い鳴き声は、笑い声に聞こえ、さらに腹立たしい。

「まったく吹奏楽のやつら、また窓を開けっ放しで帰ったな」

前任の音楽教師が猫好きで、密かに餌づけをしていたらしく、

夜になると、音楽室の周りに野良猫の姿が目立ち始める。

窓を開けっ放しにしていれば、当然、忍び込んでくる。

「猫よけでも買ってもらわないとな……」

猫を外に追い出し、窓を閉め、警備員はぼやきながら帰っていく。

その彼の背後で、ひとりでに鍵が解除され、またゆっくりと窓が開き始めた――。